

特定外来生物「ナガエツルノゲイトウ」の

染料植物としてのポテンシャル

亀成川を愛する会 小村 健太郎、他

ナガエツルノゲイトウ (*Alternanthera philloxeroides* Griseb) はヒユ科の多年生植物で、茎が中空で葉が対生で白い花を咲かす植物である。

国内では印旛沼、手賀沼を始めとし琵琶湖や西日本の各地の池等で生育・繁殖が確認されている。原産地は南米産だが、アメリカ、中国、東南アジア諸国等、世界中で定着が確認されている。

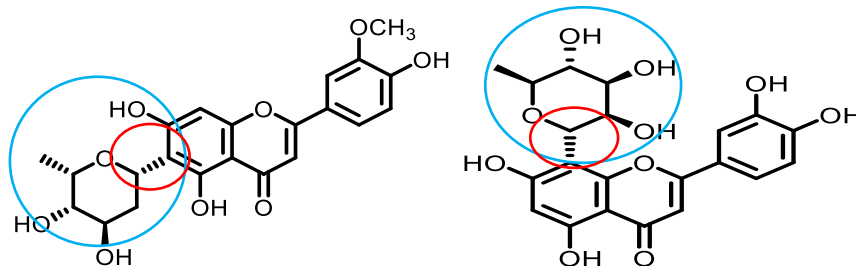
水面をマット状に繁茂（浮島状）し、その日陰が沈水性植物の生育を阻害したり、河川での水流を停滞させたり、船の航行に悪影響を及ぼすこと、また、一節からでも再生するため駆除が難しく、侵略的雑草として扱われている。そのため国内では外来生物法で「特定外来生物」として指定され、各地で駆除作業が行われている。

海外では野菜などの食用として、また、薬用植物として扱われているが、それ以外の利用方法はあまり知られていない。

今回、既知成分であるアルテルナンチンの構造式が、上代から黄色染料として利用されてきたコブナグサ (*Arthraxon hispidus* Mak.) の成分と似ていたため、ナガエツルノゲイトウの染料としてのポテンシャルを検討した。

染色後約一年間の観察の結果、コブナグサ色素と同様に退色や肉眼での色の変化が見られないことから、染料植物として十分利用可能であると判明したので報告する。

左：ナガエツルノゲイトウの成分 (Alternanthin)、右：コブナグサの成分 (ルテオリン 8 ラムノシド) 赤部が糖で通常 (赤○) の部分はグリコシド結合 (間に酸素が入る) になっているが、どちらも炭素炭素結合をしている。



キーワード ナガエツルノゲイトウ 染料植物 コブナグサ